

# 二郎兵衛 今宮の心中

近松門 左衛門 門 作

香川 ぬい〜ぬい。ぬい〜月見花見は何所も同じ。諸國名所の中々に。オクリたぐひへ難波の舟遊老も若いも下人も主も。男女がござ〜船に袂。涼しき。川風は秋と云ひても。嘘でないよの。じやれでないよの本町橋を。フシ漕出て見れば天満川。市の側なる初甜瓜買うて冷してひいやりと。瓜を二つに打割れば似たりや似たり燕子花。地紫帽子河水に。映らふ影を水波が。汲んで荷うて。器持つや桶の棒。坊主頭を振立てて。道正坊の金柄杓あれ〜。撫でて通れば一撫に。ラシはや本復の伊丹酒茶舟で下る。樽肴。地在所嫁御の里歸。上荷で送る葬禮や世の有様の様々を。一時に見る舟遊これ常になきお看と。一つ勸むる孟や。然れば船のせん字を。公に薦

むと書きたり船の屋形に三味弾けば。フシ納屋に油の臼を挽く。橋のいよこの。橋の上にて賣る煙は。地煙管團扇煙草入。役者評判扇賣。難波藝者の風俗を。橋々名所に擬へて書き集めたる藁鹽草。伊勢のを蟹にあらねども其の濱荻野八重桐を。調龜井橋ぢやとおしやる。心はの。先は御旅の神かけて。跡先に又續く者がないはさて。袖島源治は新靱ぢやとおしやる。それなげに。鹽物町のしたたるたる。然も藝には骨があるといの。地葛城常世は江の子島とよ。フシなげ〜。狗ころ〜抱。寄せて手餉ひにフシ愛らしや。地扱又嵐三十郎。調鯉座橋とおしやる。心はの。何の料理に使うても仕出が甘いは扱。櫻山庄左衛門福島ぢやとおしやる。心はの。小柄なれども張詰め

て舞臺一ぱい嵩もあり。藝に身もある口中のしより〜したる雀餅。それで藁穂の何所やらがフシひり〜とするとぞ答へける。地音羽二郎三を難喉場とは。鯖があるとの譬かや。上村吉彌は伏見堀ぢやとおしやる。義理はの。地舟板町の舟板の末には沖に乗出だし。帆を十分の印として今から人や焦るといふ事。さて市村玉柏梅田橋と見立てたり。夫なげに。はて渡れば色町越ゆれば火屋。濡にも憂にもよう〜つるは扱。調杉山平八を四つ橋とはこれどうぢや。江戸からも京からも四方へ引つり引張つた。地踏んばたかつて山村がくわつと擴けた兩足は。善願百間堀を思出す。善惡一つを嘴分けて。六義を糺す柴崎に。思案橋を思出す。篠塚二郎左を見る時は。大佛島を思出す。三代つ〜く奴風。嵐が風姿を譬ふれば。其の江戸堀を思出す。嘉十郎が顔付に炭屋町を思出す。敵は三原重太夫。序にて作りし惡心の。切で報いの。フシ来る時は。

六食屋橋思出す。思出し。陳ね行く先づこれ迄が片表。裏の御堂も高々と立齋堀を滑廻し。辨當濟まば椀家具も。釜もちやくく。あらや橋。跡へはんなり入花の茶備後橋はこちくと。寄せよく。濱際のッシ瓦町。橋にぞ着きにける。菱屋介五郎は如法なる。氣も丸額にこやかに。問申し。此の永き日の馳走ぶり亭主由兵衛さぞ草臥。地暮も近しこれからお上りなされとありければ。隱居の貞法七十三眼鏡いらす杖つかす。齒齒は一枚も抜目なき男勝のかみ様にて。問テ、それくこれ由兵衛。念の入つた馳走でいかい。慰。此方の内から出た人が。店一軒の主になり商もしにせて。親方一家を養應とは此方とも快慶其の身の手柄。さりながら女房がなければ。人の世帯は落付かぬ。身代樂の女房を早う持つて落付きや。さうでないかとありければ内儀も共に打笑ひ。何故に女房持ちやらぬ。地但し何處ぞに思入りかなあるか

いの。由兵衛思ふ圖に乗りて。誠に今日はお心ようお遊びなされし忝さ。其の上女房の事までお尋ね。御意の通りちと思入りござれども。地此の女房が行き易うて行きにくい。どうでかみ様お家様の。お口を借らねば参らぬ事。はてこちとがいうて濟む事ならば肝煎らいで何とせう。其の思入れの名は何といふ誰ぞいの。由兵衛殆ど笑聲に入り。ヤア有難い忝い三度禮拜仕る。名を申せばつい御存じされども先づ只今は。お名をばえ申すまいよのしやんく。地サア是からが本酒。亭主から又始め。憚りながら介様へ。御香に替女殿一節頼むといひければ。問介五郎盃受け申しかゝ様。地二郎兵衛が法隆寺より戻つたら連れてきて。あれが好きな心中を語らそもの。ヲ、さればいのせめてきさが居たらば。祭文を聴かうものと。いへば由兵衛興醒顔。地ム、二郎兵衛は母親の年忌に當り。在所へ参ると申したが。きさも一所に二郎兵衛と

連立つて参つたか。ア、つがもない。地さは此の頃風引いて。頭痛がするると宿へ往たと。聞きも敢へず由兵衛。地エ、内方も此方等がゐる時分と違ひ。自墮落になつたなあ。青二歳の二郎兵衛め丁稚上りの分として。母の年忌で候として此の忙しい最中に。十里近い法隆寺へ行せ様が氣に入らぬ。事にきさが煩うて宿へ歸つた時分と同じ様に内を出でろくな事は仕出すまいと。滅多無性に一人腹人も知らぬ心を苛ち。船辨慶にあらねども。所知盛か沈みし其の有様に。又由兵衛が辛氣を燃し。舟端蹴立て盃陥割り、シ前後を忘するばかりなり。地菱屋一家の人々は何の心もつかざれば。早日も暮れた。最早これから歸らうと。上り支度

を由兵衛危い事はちつともなし。提灯用意致せしと取出せしが南無三寶。蠟燭を忘れたこれ久三。大儀ながら一走此の通の百貫町。地四五町往けばおきさの宿。定めて

知つて。あらうぞ由兵衛が申す。蠟燭一

挺貸してたも。ちつと氣色がよいならば。ちよつと此處まで出てたもというて同道しておじや。地序に内に氣をつけて誰もないか見廻しや。早う早う合點か心得ましたと帶もせず。襦袢一つの裸身や、ッ百貫町へぞ走りける。地昨日今日前髪とつて下手代。まだ新物の二郎兵衛おきさと深き中入の。南京綿の上邊には手にない様に仕立口。在所はいかな横堀の知邊の許に隠れるて。

暮るれば其處へと通路の。仄に見ゆるあの舟の屋形には。貞法様お家様。舳には安堂寺町の由兵衛ヤアこれならぬ。外しませうありやどうぢや。菱の提灯久三が持つて。後から来るはおきさぢや。様子が無うては叶はぬ筈と。氣ももやくつて蒸暑き。材木納屋に立隠れオクリ事の様をぞ窺ひける。フシきさは程なく。地走寄り是は皆様今日はお慰みと。只今久三の物語私が氣色もしかくとはなけれども。かみ様お家様へ頼みあけます御祈訟事。直に是へ参り

しも。ア、おとましい事出来まして。一倍氣合に當りますと。ッ溜息吐いて居たりけり。貞法もつくく見て。此方へ訴訟の事有りとは。どうした事ぞ咄して見や成るべき事なら聞かいはと。さも懇の詞の末ア、お馴染とて奈や。昨日の暮方三田から私が父親上られ。小さい時から在所で。約束し置いた男の姑の煩故。急に嫁入を急いで來た此の度お暇申しうけ。三田へ連れて歸りて嫁入さすとの申し分。地御存じの通り私は幼い時より大阪に育ち。手痛い事は仕つけず殊に病者な身を以て。在所の手業がなんとして。調夫故當座の間に合に。内方のかみ様が御懇に遊ばし。舊功なした若い者ども數多の中。一つにして此の大阪で物の見事に躰てやらう。必ず外へ約束すなと常々のお詞。是が反古になるものか在所へどては歸るまいと。私は申しますそれで親の一分が立たぬと。いうての親子譚。地多分これへ見えませう私が口の合ふ

様に在所の嫁入をお止めなされ下されと。ッつどく語る下心。地二郎兵衛は合點にてあの言分は我故。男に親を見替へる心中者めと。材木に抱付き、ッぞくく悦び居たりける。親はとほく尋ねつき。葦屋殿のお船は是か。きさが親三田の太郎三郎でござります。ヤア親父親か。それ酒進せ茶進せと。取々挨拶ありければいやお茶も食べました。調定めてきさめが咄でお聞きなされませう。在所で許嫁の方より。念々に欲しいと申すにつき。中途ながら一生の身の固め。斷立て、お暇取れと申せば。在所へは行くまい大阪で男を持つと申す。それは我儘親の云條を反くかと。叱つても聞入れず。己が男は内方のかみ様次第に任せてある。是非とも親のこうけんに在所の男持てならば。おりや死ぬるが合點か。娘殺そといふ事かと大聲あけて吠えます。お主のお慈悲に御意見を頼みます。在所の婿と申すも食ひ兼ねぬ身代。地行きをれば

今

心

の

宮

中

心

の

宮

中

心

の

宮

中

心

彼奴が果報。世帯佛法腹念佛。口に喰ふが

者がたんと有る。良い婿取つて後々は。親

衛分別顔にて。これ貞法様。是は大事の

今

一大事彼奴が食ふは違つて。大阪の男に喰

達も大阪へ呼ぶ様にして遣らうと。念の人

請取物おきさも若い人の事。後日のもやも

心

付いたか。やい其處な呆氣者。在在所の男

つたる割口説。由兵衛扱はあのきさを我等

や喧ししちよつと親子に手形させ。きさが

心

ちや大阪の男ぢやとて食ふに二つの味な

へ隠居の心當。日頃の念願成就とこれ親父。

縁付き貞法様の御指圖背くまい。外から一

中

し。地一人の娘に親の身で無味ない男を食

隠居様へ任せて在所は變改したがよい。

言邪魔させまいとの地手形が。取りたいも

心

はさうか。エ、親の思ふ程にもないと、フシ

此の由兵衛も旦那の蔭で。安堂寺町に手も

のと差込めば。貞法打領き。是は由兵衛が

心

涙を流し恨みける。おきさも流石親心。思

廣う商し。手代の一人も使つて今日のや

いふ通り手形を取つて置きたい。それで

心

ひやれども二世かけて交せし事も捨てられ

うな饗應に。二兩三兩遣ふも皆親方の光。

も父様無筆なり明日でも私がかみ様へ。地

心

す。只かみ様のお情を頼みまするとばかり

まだ女房を持たぬはかみ様へ。とんと任せ

手形してあけませうと辭退する程由兵衛。

心

にて、ステテ同じく。泣いて居る姿。貞法も

てあなたの媒酌待つてゐる。地かみ様のお

いやくたとへ無筆でも判がなくば筆の軸。

心

不便さに親父の言分理が聞えた。調さりな

心で此方と私が婿舅に。なるまいものでも

手形は我等筆取ると煙草盆の硯引出し。早

心

がらあのきさが病者で。在所方の荒働。一

御座らぬなうおきささうぢやないかと。い

や書きつける提灯の蔭二郎兵衛見濟まし聽

心

年と續くまい。自身に藝もない事が銀の湧

へどもきさは胸塞がり。ア、どうやら知り

濟まし。ヤア彼奴が勤めて手形させかみ様

心

く手を持つてゐる。二百目近い給分を只の

ませぬと、フシ打傾きてゐたりけり。地太郎

賺してきさを貰ふ分別。此の判させては一

心

女子にかこふか。地度い大阪に男養ふ商賣

三郎一々に聞届け。聞きさめが申した分で

大事何とせうぞ石を打つて。提灯を打消し

心

とはあれらが職。五人三人は針一本で樂々

は更々胃の脛に落ちませぬ。かみ様のお御

てのけんと。石を尋ぬる其の間に手形の文

心

と過す手を持ちながら。山家在所へ煩ひに

意で發起いたした。御尤々々。地親方の様

言思ふ通に書濟まし。これ宛名は菱屋四

心

往かうとは。無分別かと思はるゝ此の談合

らるゝと申すに先は幸ひ一門中。何の仔細

郎右衛門様貞法様。親三田村太郎三郎。調

心

は取置いて。きさは此の貞法にとんと預け

も申すまい此の上はきさめが縁付は。どう

サア印判といひければ御念が入つて忝い。

心

て置いてたも。此方の内にも子飼の者養る

なりとももうお暇と。立たんとすれば由兵

私の荷が下りましたと。巾着の印判黒々と。

心

同サアおきさ我が身も判を据や。いや私は  
印判持ちませぬ。そんなら父が裏判をと。

地同じく据ゑて貞法様。いよく頼み上げ  
ますと差出せば、く。是では此方も如  
才がならぬと。数珠袋に納むる内二郎兵衛

溝の石を揚げ。由兵衛目がけて打つ石が。  
船板に當つて一はずみ川へざんぶと水散つ

て。由兵衛一絞りそりや暴者が石打つわと。  
立ちあがる所を續けて打てば由兵衛が。額

に當つてあ痛しここれは危し。皆々屋形へ  
きさも乗つて戸を閉ちやと。無理無體に船

に乗せ親父も早う。去つしやれ。個性我さ  
つしやれなといひけれどもいや。是は目

出度い。きさが嫁入の談合に石打つとは吉  
左右。地目出度うござるといふ小鬘にはた

と當れば南無三寶。こりやどうちや目出度  
すぎて芽が出たと、フシ抱へてこそは歸りけ

れ。地猶も續けて打つ石に。提灯も打破れ。  
由兵衛も敗亡しおきさに心あるやつが。戯

諺かはくに紛れない船頭舟をやつてたも。

久三おじや此奴めを踏んでくれう任さつし  
やれと。上るを見て二郎兵衛横へきれてぞ

三三、歸りける。地由兵衛久三大汗にて何方  
へ失せたくと。橋へ廻れば年配なる浪人

侍。髭奴の草履取何心なく來る所を。真  
ぬ覺えたかと久三郎奴を橋へ横投けに。真

甲を四つ五つ疊掛けて喰はする。主人これ  
はと立歸り久三を掴んで打ちつけ。踏付け

く踏む所へ由兵衛駈付け。ヤア爰にけつ  
かるかよう舟へ石打つたと。掴みつく手を

確と取り。何さ石打つたとは誰が事。慮外  
者めといふを見れば歴々のお侍。ア、く

御免なりました人違で粗相致しました御許さ  
れて下されませ。お慈悲でござると泣叫ぶ

何の御慈悲と捻上げ。向脛を俯向けにはた  
と蹴返し。これ奴腹わたの出る程此奴踏め。

任せておけろと土足にかけ。うなよく身を  
打たせたナア。覺えて居ると。地胸骨尻骨

うんと踏めばぎやつといひ。うんと踏めば  
ぎやつといひ眼玉も出づるばかりなり。

もうよいわく。死なぬ程にして置けさ。  
地此方へ來いと主従は、フシ怒々として歸り

けり。命からく、由兵衛あ痛くと起上り。  
久三其處にか。エ、聞えぬぞや。今の様

に踏み居るを見てゐる筈はあるまい。や此  
方が聞えぬ。地此方故に最前喰はされたり

踏まれたり。エ、振舞食うたばかりに云は  
れぬ人の肩持つて。阿房くさい振舞が戻つ

た。御座れ戻ると立上る。ヲ、其方はせめ  
て振舞を食うたが。此方は物入振舞うて。

舉句にした、か踏れた。向後響應致すまい  
御馳走が身の葦屋。酒盛つて尻踏まれたと

獨。言して三三、歸りけり。

中之巻

フシ 本町や。地新物店の若い衆は。女とも  
見えず男なりけり、女子交りの針仕事。つい

一針が永き世の縁の端緒しどけなく。尻も  
結ばぬ絲櫻、フシ綻びかゝるうたてさよ。地

二郎兵衛は在所より戻つた顔して二三日。  
仕事は常より精出せどもきさに勘言候言。

乾反し直し上下を盤にかけて打ちけるが。

同エ、是は糊加減の悪い袴ぢや。よそくの人の心の様に。彼方へはひつたり此方へ

はひつたり。移り易い胸根性なうおきさ殿。

此方が頓てかみ様の肝煎で。安堂寺町へ嫁

入の時。此の袴を矯殿に着せたらよかろ。

其の晩に石打たれて小鬢先割られぬ様に。

抱締めてるさつしやれやいの。おきさ殿や

いのおきさ殿う。ヲ、肅しい。己や野ぢや

ござらぬ是。此の私が仕立てる布子も。誰

やらが氣によう似て。なんほ直に縫うても

横へくと往き居る。聞分けのない者は此

方に似合ふ着さつしやれ。私等が氣には入

らぬといへば。ハテ氣に入らずば打破つて

のけたがよい。ム、打破つてもだんないか。

それはどうして打破る。まつ此のやうに打

破ると。地樋振上げて打盤を。とんく

く。何方やらの男と他方々々の女と。渡

らぬ先にとんくく。とんとんととぞッ

シ打ちにける。地重手代口々にやい

たえな。それ向ひの出店から旦那のわせる

見えぬかと。云ふ所へ四郎右衛門は。眼病

に毒とは知れど渡世の世話。調なんと仙臺

の注文は仕舞うたか。秋田の荷を積んだら

ば今橋へ往て金請取りや。ヤアト庵老は未

だ見えぬか。地ト庵が見えたら灸をせう女

子の手が薬ぢや。きさに點ゑて貰はうし二

郎兵衛に手傳さしよ。手のふるはぬ様に仕

事仕舞へ。残りの者は出店へ行けといふ所

へ。調物まう澁川ト庵御見舞申すと。つ

と入ればヤアお出でか待ちかねました。地

先づ是へと上座へ通せばト庵。今日は廿三

夜なれど一向宗はお構ひない。明日から八

専土用前一段とよう御座ろ。調どれ脈を見

ませうか。私の申した通り薬喰をなさる、

か。ハア甚う脈が良うなつた。卵を參る驗

に。左の脈がふはくと打ちまする。ム、

魚の中にも鱈などは大温の物。豫て無用と

申したよもや食ひはなされまい。地右の脈

が頭勝なほもし播子木などは參らぬか。風

氣もなし點を致さう視々といひければ。奥

で點を頼みませう。これきさ二郎兵衛。油

火灯して艾を揉み。地先づ二三百燃つて置

きやとオクリ打連れ、奥に入りける。地あ

つというて二郎兵衛行燈點しつ土器灸り。

艾出して揉まんとするをきさは立寄り胸ぐ

ら取り。調こりやあんまりぢやぞや酷いぞ

や。先度から染々と物いふ間もない故に。

心底が語りたさ傍へ寄れば。ひかしやかと

拙言の有るじやう。安堂寺町とは何事ぢや

ア、嫌らしい。地是なう誰しも此方の

年配では。十六七の振袖をすき好む最中に。

四つも五つも年嵩の私に惚れて下された。

私や其の心に打込んで親兄弟も棄てたぞ

や。在所は生れ故郷なり兩親の傍に居るも

のが。往きともない筈はない何の所縁に大

阪に。執心はなけれども此方といふ人に離

れるが悲しさに。お主を騙し親に背き身を

狂はず心を。可愛やともいはずに面白さう

に拙言。コレ死んで見せうか死に兼は仕ま

せぬ。二郎兵衛殿と抱きつき、ッシ聲をも。立てず隠し泣き。二郎兵衛もしを〜と。

堪や〜と背中を撫で、ノシ共に涙を流せしが。地シテ先度の手形の文言は。どうぞど

うぞといふ所へト庵奥より立出づる。御ヤ是はもうお歸りなされますか。れば歸ら

うか。まそつと遊んで灸行の相伴せうか。地やあゝいと煙草盆引寄する。二人は艾拵

へながら此の首尾に語りたし。早う去ねがな〜ともがけど去ぬる氣色なく。詞なん

と灸行いひ付は無かつたか。冷麥か素麵か。なまなか茶漬位ならいつそ戻つて寢て

くれう。地内證知らしやといひければきさは悦びさし心得。旦那様は毒断で夜食はあ

がらす。ト庵様へはつい茄子の淺漬で。茶漬進せとお家様のいひつけ。早う歸つて御

寢なつたが増して御座ろとたらせども。何ちや茄子の淺漬ぢや。一段よからう。

それに出端を付けたらばと茶臼形になるを見て。地おきさも呆れいつそ泊つて御座ん

せと。佛頂顔に二郎兵衛艾に火をつけ庭の隅。ト庵が雪踏の裏。物は試と燻ぎ立てッ

シ燻ぎ立て、ぞ燻らす。呪は理外にてト庵氣にや徹しけん。是は不思議千萬。

俄に宿へ歸りたいもう往にましょ。地滅多に往にたうなつてきた。ハチまちつとお遊

びなされませ。いや〜俄に往にたうなつて足の裏がこそばいと。疊に足を摺付〜

降りければ。二郎兵衛雪踏をちやら〜と直し申しト庵様。旦那那の目も直りませう

灸が早う験きましたと。地いへども我が身の上とは知らずヲ、ト庵が名人御覽あれ。

一炷で験が見えましよと。足の踵の氣味悪ゆに、フシ雪踏擦らせて歸らる。サア旦那

の出られぬ間に手形の文言早う聞きたい〜。聞さればいの文言はどうやら讀んで

も聞かせず。宛名は養屋四郎右衛門貞法様。親子が印判しましたと語れば二郎兵衛はつ

と驚き。地エ、由兵衛めが文言を聞かさぬは曲者。娘きさを由兵衛へ遣はさうと書い

たやらしれぬ。日頃そなたに心を盡す由兵衛め。どうこけてもうぬが爲のよい様に書

いたは定。三田の親仁も粗相な。手形の文言吟味なしに判するといふ様な。これ後

の邪魔とはその手形。地どうぞ手形を盗んで破つて棄てたいものぢやといへば。

ノ荷且にも盗むといふは怖い〜。ハチ錢銀の手形か徳徳になるにこそ。地傍置山兵

衛との色づく旦那に損徳かゝらぬ事。いつもあの筆寄に手形ども置かる。鍵はそこ

らに見えぬかなんのことらに置かれうぞ。お家様かみ様旦那様。三人の外介様へさへ

持たされぬ。何時ぞ序にかみ様頼み文言見たがよいわいのと。いふ所へ四郎右衛門な

んときさ二郎兵衛。艾が未だ出来ずば向の outlet へ往て。女房どもにも撫つて貰へ。

更けぬ先に仕舞ひ度いどうぢや〜氣がせく。あい〜灸も皆出来ました。御勝手に

遊ばしませ。そんなら爰で斯う向いて。それ二郎兵衛菓子盆。殺煎豆山椒に。小蒲團

敷けと拾しほくると灸やいのばば。前まえを後うしろに目  
は見えず何をせうとも頷うなづいて。地ちくすりく  
すりの灸やい箸はしオクリ痴話ちかの便たよりの薄煙うすけむり。地ち十四

の灸やいに水みづが湧わく盛もの女盛めいもの男おとこ。手てを締め身み  
を撫なで口くちを寄よせ。誰たれを忍しのばんさしも草くさフシ  
是こゝぞ因果いんぐわの皮切かわきりなる。地ちやうく灸やいも點ちふ

おろす主人しゅじんの帶おびの前巾着まへきんぎょ。後うしろへ廻まわる紐ひもとけ  
て繫ひぎし鍵かぎは巾着きんぎょより。半分はんぶんこほれか、  
りたり二郎兵衛にらうべいゑ見付みづけて。箆へら竈かまどに指ささしき

さに目配めくばせ。天あまの與かたと取とらんとすきさはい  
やぢやと手てを振ふれば。大事だいじないとして頭かみふる。  
手てをふる頭かみふるひく。手てを出だし手てを引ひく

唐猫からねこのフシ煉ねりを弄もふ危あやさや。調しら申し旦那様だんなさま  
熱あつつくばちと押おへましょか。いや熱あつうはな  
いが精せいがつきた。よい加減かへんに置おきたい。ま

ちつとでござんすそれまちつとぢや。地ちまち  
つとぢや。そりやよいはと鍵かぎ引出ひせば狼狽ろうたい  
へて。はしの灸やいを取落とす熱あつやうく。も

うく是こゝで仕舞しまはう奥おくへ往いでちと寝ねよう。  
二人ふたりながら寝ねんでくれようしてくれた過分かぶん

など。悪事あくじと知らぬ主ぬしの慈悲じい。仇あだとなつた  
る身の果はてのオクリ冥加めい加に盡つくきしも道理だうりなり  
フシ二人ふたりは顔かほを。地ち見合みあはせて鍵かぎは取りは取  
つたれど。主ぬしの目めを眩くらませば胸むねが慄おそうて怖おそ

しい。誰たれぞ來きるか番ばんしやと合あせて見たる箆へら  
竈かまどの鍵かぎに。あたるも地獄じごくの錠前じやうぜんを。明あけて  
搜たせど衣類いりの外ほかは三原さんげんの合口あひぐち時代の印籠いんろう。

箱はこに入れしは蓮如れんじよ様の名號なごう。ハア合あ點てんのい  
かぬ。手形箱てがたはこはいつも土藏どざうへは入いらぬが。  
戸棚とどに入いつたか知らぬと地ち常見ぜんみ覺さえし戸棚とど

の鍵かぎ。何なにの苦くるしみもなく戸とを引ひ明け。搜たせば一  
通上書とうじやうに手形てがたとあり。忝かたじけない是こゝが欲ほしさの狂  
亂くるわんと。戴たいきく二つ三つに引裂ひき。懷なつかし

捻ひね込んで跡仕舞あとしまはんとする所ところへ。調しら門かどを明あ  
けたは誰たれぞ。だんない者と由兵衛ゆべいゑ上口あが迄いたつ  
かくと。地ち影かげを見るより二郎兵衛にらうべいゑ戸棚とどの

内うちへ這入はれば。きさは前にひつ添そうてハア  
由兵衛ゆべいゑ殿だんか。上あらしやんせと後手うしやうに。フシ  
そろく戸棚とどを鎖かぎしにける。調しら由兵衛ゆべいゑとつ

くと見濟みまし。旦那だんなは灸やいをなされたけなど

つと上あつて是こゝやなんぢや。大事だいじの鍵かぎど  
も取散とれ箆へら竈かまどの口くちも明あけてある。これおき  
さ退ひきや。此こゝの世間物騒せけんものさわに戸棚とどの錠じやうは何故なにゆゑ  
おろさぬ。地ちさらば鍵かぎも腰こしに付け。錠じやうをお  
ろして置おきませうヤアしやんとなど。地ち卸おろす

錠じやうの音ね。内うちに響ひびけば消入しょうにゅうる心地こころきさはわな  
くくくと。直ただに死しにたいいばかりにて  
フシ前後ぜんごにくれてぞ見えにける。地ち由兵衛ゆべいゑき

さが手てをむす取り。調しらこれおきさ。先度さきど  
船ふねへ石打いしうちたれた其そのの疵きずがこれ未だ治ならぬ。  
此こゝの打手うちてが知しれました。今宵こんや旦那だんなの戸棚とどへ

入いつた盗人たうじんと同人どうじん。定さだめて此方こゝも助たすけたか  
らう。戸棚とどを明あけて沙汰さた無なにして遣やるか。  
旦那だんなの耳みみへ入れうか此方こゝの心こゝろ一つぢや。地ち

何なにとくといひければ手てを合あせて頼たのみます  
る。日頃ひごとは恨うらみもある筈はずを打棄うちすて、其そのの詞ことば。  
生々世々しんしんせせ迄いた忘れませぬ一生いっせいの内うち此こゝの御恩ごおん。

どうしてなりとも送おくりませうどれ鍵かぎ貸かさん  
は明あけましょと。取付とけば押退おしひき。四ヤア甘あま

い事こといやんな。何時いつぞくくと今迄いま釣つられた



は何十度。此の以前貴様が津山立三殿に奉公した時から惚れて居た此の由兵衛。是非思を晴さうなら。其方の口へ手拭捻込んで。寝る術も知つたれどもそれは戀とは言はれぬ。此の戸棚が明けたくば此の首尾にいつちよつと。身を穢して下されちよつとちよつと。取付けば突放し逃げて廻れば追廻し。抱付く所をあた面倒なと突倒し。由兵衛の生畜生。文言知れぬ手形に能う判捺さしやつたなう。今其方と寝たらばなんぢや戸棚を明けてやらう。忝い嬉しい。夫が嫌さに此の苦勞いひたくは云や大事な。地二郎兵衛殿と此のきさと懇をしてゐる。戸棚の中は二郎兵衛私科は遁れぬ。癖かぬ仇に訴人しや生畜生の死畜生と。所存極めし涙の體。由兵衛聲を立て。ヤア若い衆は出店にか。盗人が入つたぞ久三や竹は宵の口。地何所に居ると呼ばはる聲貞法始め長兵衛權兵衛。皆蹴足にて駆付ける由兵衛居丈高になり。これ御覽あれ。且

那殿の腰を離れぬ此の鍵を。盗み出しあの如く。箆筒を明け戸棚を明けし所へ。身が来るを見て戸棚の内へ逃込んだ。所へしやんと錠を下した中に居るは二郎兵衛。手傳は此のおきさ證據人は此の由兵衛と。出來顔の腕掻きさは涙に性根もなく。内外の者ははつとばかり。フッ顔を。眺めてゐたりけり。貞法鍵を腰につけ。四郎右衛門はもう寝てか。旦那に聴かせて兎も角も思案が有らうとありければ。由兵衛先づ町代を呼びに遣り。宿老殿へ知らせて。町中提燈。繩よ棒よと奔めければ奥より由兵衛くゝと。手を叩いて呼ばらるゝあいと應へて奥に入れ。四郎右衛門小手招き。次第とつくと聞届けた。子飼と思ひ肌を許し扱も憎い奴。灸の間に鍵取るは恐ろしい仕方。さりながら己が聞いてはむつかしい。地夜中にわやく町内の外聞もよからず。外へ物さへ散らすは己が聞かぬ分にして。濟まし様もあらう事。何いうても夜が更け

る二郎兵衛めは籠の鳥。其の分て戸棚に置ききさめは今宵請人の。姉めにきつと預けにやりや。急いで粗相もあるものつくと分別して見よう。女房子どもが怖がらう直に出店に泊らしや。手代どもも向へ母者人は爰へ来て。お寝みなされと申して其方も歸つて明日おじや。必ず何にも權便に宵の中に皆寝さしやと。蚊帳に入れば由兵衛元の所に立出で。地夜中に旦那のお耳に入り眼病に障れば如何。何事も明日の事これ長兵衛權兵衛。大儀ながら此のきさを請人の姉女夫に。地きつと預けて直に出店へいつて寝や。サアきさ立てといひければ。申しかみ様参ります。私が身は構はねども。二郎兵衛に科のない段は申譯のある事。地お家様へもお執成し萬事頼み上げます。盗人の名を取り是が悲しうござんすと。わつと泣出し送られ行く。オッ目も電で。られず不便なり。地サア貞法様奥へ御座つてお休み。我々も明日早々久三も表を

よう閉めて。夜敏に寢やとて出でければ欠伸を直にあゝといふ。返事眠たき夜中聲ッシ廿三夜の代待や。地門の通はまだ四つ。内は静まる燈火も心も細く三更へ更けにけり。フシ物の憐み深きこそ。後生願のッ心な

れ。人も寢入りて貞法は寢覺の床を起出でて。戸棚の傍に差足し。四こりや二郎兵衛生拘摸め。聲聞知つたか阿房めと。地こと

と敵かるれば地獄で地藏に逢ふ心地。ア、かみ様がお恥しや。庖丁でも薄刀でも柄を抜いて戸の間から。そつと入れて下されませお馴染だけのお慈悲ぞとエテ泣く

聲漏るるばかりなり。アヤレ死ぬる程の性根でさもしい事をするものかと。地袖を覆うて錠鍵の音せぬ様に戸を明けて。其所へ出をれ。町人といひ年寄の婆なれど。菜刀心なりとも己れが首は切つて遣らうと。故意と詞を荒ら、かに叱られてしよほくと。這出づる帷子も汗に浸りて時の間にッ顔も瘦せたるむごらしさ。地流石子飼の

主心吐る心はわきへなり。思はず涙を流さる。二二郎兵衛顔振上げ。貞法様面目もござりませぬ。お主の罰とばかりにてッシはたと。俯伏し。泣きけるが。御存じの通り今迄に一錢掠める我等でなし。氣も遣はねども恥しや。きさとねんごろ致せしを

由兵衛めがねたにこみ。何かな見出さう見出さうと文言知れぬ手形を書き。きさき親子に判捺させ旦那のお手に入りし事。如何にしても覺束なく此の手形取らんためばかり。戸棚の内で微に聞けば旦那のお耳へ人

らぬとやら。地どうぞお耳へ人れずに濟むやうに頼み上げます。あの眞直な旦那殿お心の慶祝が。首斬らるゝより悲しいと。隠居の膝を戴き、ッ聲に喰付き泣きゐたり。阿やれ其の言譯は己れが心の料簡よ。

主の腰の巾着明け、屋内の錠を盗取り此のだいそれた言譯が。出處でそもや立つべきか。由兵衛が我が儘な手形とは見たれども。其の場は其の日の亭主方無興と思ひ

其の手形は。とうに破つて棄てたぞや。きさめと己れを夫婦にして末では所帯に駄んと。此の年寄が苦に持つたも斯う破れては水の泡。何程慈悲がしたうても。理を非に

は任せられず。目の明かぬ主と由兵衛などがいひ立てては。傍輩どもも氣がふれて後で人も使はれず。己れに不便もかけられず。思切つてきさを由兵衛にやれ。時には四方圓くなり其方も是に勤めよく。上の恩も送らるゝ。己れが心持次第池田の姓の中にて。女房には事故さぬ地きさを遣る

かどうするぞと。我が手に意見をする如く叱りつ泣いっ割口説。二郎兵衛も只泣き人つて。スエテ暫し返事もなかりしが。一々お詞聞入れぬは。畜生に劣る二郎兵衛なれども。あつと申して御恩はよも送るまい。

元服も致したものを丁稚よりなほ押下けて。地さしてもない事言立てに踏まぬばかりに撲ち敲き。蟲でも堪忍なり難き無念を渡ぎ参りしも。お家のお蔭で一日もきさ

と一所に住居をせば。由兵衛が面を踏返した同然と。思へば今日の奉公も心まめしう勇みしに。やみやみときさめを渡しこりや見たかといふ面が。見てゐられうか口惜しや。どうも私は堪へまいと無念涙は目に餘り。袖を食切り我が身を掴み。身を顛はして歎きしは、フシ心底。道理に。無慚なり。いや申す程お主への慮外。兎に角元の戸棚に入れ彼奴が致した通り。錠を下して下されませ直に牢へ参らばこれ。今生のお暇乞。御恩を報せぬ段は御免あつて下されませと。這入る所を引出しやれ恩知らずの物知らずと。腹立涙の隙よりも。四十二の歳より飼育てし。二郎七の昔忘れたか三日にあけず煩ひて逆も用には立つまじき。往せくと人毎にいはいぬ者もなかりしを。此の婆一人情を張り在所へ戻さば死ぬるは定。即本の慈悲とは此の事と十八の春まで。呪よ薬よと孫子にもせぬ世話をして。四郎右衛門にも物入させ。やうくと人にな

し。傍輩どもも嫉む程人に勝れ目を掛けし。牢櫃に入る時菱屋の婆が阿呆盡し。盗人を飼立て親方は眼病なり。身代空けるも知らぬと四郎右衛門迄諱らせても。己れが一分立てたいな。御堂の朝時参りにも。女子ども起して苦勞かけては後生にならぬと。己ればかり伴れしに明日より朝時に参られず。願ふ後生も願はせぬあさましい氣が附初めた。此の家に馴染めば犬でも猫でも貞法は酷いめが見ともなく。可愛さにこそ口叩け。此の上にも我を立てて己れが情を情に立て。死にたくは戸棚へ入れと泣いつ威しつ様々に。慈悲心餘る意見フシ後世に入つたる驗なり。二郎兵衛聞入れてや御尤々々。今合點参つた。思切つて由兵衛にきさを遣りませう。ムム、夫が定な誓文立て。來月は母の七年忌。此の頃取越致した此の母を。奈落に墮しませうと後先知らぬ誓文の。フシ一つは罰も當るべし。テ、出来いたく此の家久しい重手代

由兵衛と張合つて勝つて負けといふもの。何事も貞法が美しう濟して違らう。二階へ上つてもう寝めと戸棚の錠前しと、下し阿房めがおきさばかりが女房か。彼の様な洒落者より。おむくむくの手人らすを抱かせうぞ。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛とて奥に入る。フシ心殊勝に哀なり。二郎兵衛恋とも誠とも氣ももうととりと取りけるが。さもあれ彼の手形障子の破つて果しとや。今破つたは何ぢや知らぬと取出し合せて見れば南無三寶。七百五百目上本町の家質の手形。此の咄に元利残らず相濟む筈。はア。地はつと開いたる口も、何に塞がん身の罪科。一災起れば二災起る。雨雲の空恐ろしく。よろめく足許判の破を引寄せて。合せて見繼いで見て繼ぐに繼がれぬ命の難儀。どうも生きては居られぬ死ぬるとも生きるとも。エナきさは放さじ隠れじもの。先づ此の家を服殺のひよろつく足

そつと明けければ。竹が蚊帳に丸襦袢を焼く紙燭明々たり。エ、邪魔な爰を通らば咎むべし。ア、如何せん何と扇の一煽ぎ。はつと消ゆればア、悲し。情の風めや火を消した。今宵一夜は蚤と蚊に此の肌を手向けるぢや。あつたらものを久三でもおじやらいで。二郎兵衛殿とおきさ殿挨拶見れば羨しうて堪らぬ。此方も盆には在所へ往て。菓島でしけろと。ころりと寝たる音ばかり。フッ斬の闇はあやなしや。うくんと門口の眞の木堅き家の風。鍵は久三が預りにて。朝比奈ならねば門破。フッ詮方

盡きて立ち居たり。預けられたるきさが身の出でては姉の迷惑と。知れど夫の懐しさと。わけて割なき割菊の紋の風呂敷引包み。葦屋の門口欄の穴覗いても音信は。蚊の聲ならで便なく胸じやくりして泣く聲の。内へ微に聞ければ二郎兵衛も欄の穴。顔を寄すれば鬢の香の。梅花の薫はおきさか。おいの二郎様か。語りたい事ばかり

爰がどうも開けられぬ。此の戸一重が關守と。互に身をすり氣をもがき。フッ泣くよりの外の事ぞなき。難波橋の辻に寝し犬一疋吠えかゝる。聲につれて方々より七八疋。きさを感して吠立つる。フッ恐ろしなんども詮方なく。放れがたなく門口に猶取付いて立つたりしが。中の間の竹目を腫し。あれ久三門にいかう犬がなく。何もないか起きて見や。おおうと答ゆる寢聲の返事。そりやこそ久三ときさは東へ二郎兵衛は。中戸の蔭にぞ隠れる久三は例の襦袢一つ。寄捧提げ眞の木明け。潜開いてつと出で。ハテ何にもないもの非人かな通つたか来い。来いと。嗚呼べば犬ども尾を振りかゝる。エ、蒸暑いが外へ出れば極樂の西風。エ、添いと。涼む間に二郎兵衛。積重ねたる染地の日野絹。一反解いてくるくく。身も頭も眞白に引つ包み潜をぬつと飛出づればなう悲しや幽霊ぢや。幽霊よ幽霊よと逃込み門口はたと鎖す。危なや

地獄極樂の塙筋からこれ爰と。招かれ寄りて何事も先づ此の近所を濕いての事。當はなけれど南の方人や咎めんぐるくくと。絹をも包む世を包むその風呂敷の木綿中身のなる。果こそ三五

二郎兵衛おきさ道行 下之巻

歌一つとや。一つ涙の漣の糸。落ちて三塗の川となる。二つとや。筆もあれかし我が心。書いて後世に止めたや。三つとや。見たや聞きたや。故郷の。親の生顔。フッ夢にだに。夢さへ見せぬ死出の夢。醒めては何時か此の娑婆へ。フッ歸りこんどの藝入は。女夫連でと約束の。地盤正月の十六日お待ち樂みし我々が哀れ地獄の。釜の蓋。開くを待つべき罪人とオクリ。呵責の。眞はよもやその。シテ愛しい此方。ワネ可愛い其方。シテ脱すまいぞや。二人厭さじとフッ縋り抱寄せ泣く姿。スエテ咎めて吠ゆる犬の責。此の世に地獄見せけらし。是も思へば親の罰。私は親よりお主の報。オクリ育て。られたる

今心の中心

お情や後生願の親方の。宵にや和讃夜中にや念佛。早真夜中のフシ月魄の。フシ空を力に東堀。澄み行く水に影映る。我が身の濁恥し、恥は暫時の浮世なりとも。戀をする身の手本町とは二人が。心一つに

米屋町とも。思ひはかりて後生七生助か

る。己が殿御は日本おろかよ唐物町にも。

稀な男のちよきりこきり小女房。花の様なる若子を儲けて久太郎町とて。やがて寺入

久寶寺町。地其の豫言も。フシいつしかに。

フシ空寢の夢の博勞町。地誠に私もこなさん

も。跡には親の枯れ残る。老木の老の世は

さかさまに。フシ順慶町も空ごとや。安堂寺

町も子故の闇に迷はせ。ません不孝の罪。

何と通れんあさましと。フシ又引寄せて泣

く涙。袖にさし來る鹽町や。長からぬ世に

長堀の樂な世界を心から。九之介橋や是や

此。歌瓦屋橋とや油屋の。油搾木の音に聞

く。お染に染めし久松は。いつの時雨の一

半。洗へど落ちぬヨイ戀衣。世に弘がりし

仇し名を。よそに諺ひし言の葉や。其の油

屋の一節も。師走油か。身の上にイ。かゝる涙と溢れそひ明日より同じ三味線に。法の灯油屋のオクリ回向をへなすこそ。フシ哀なれ。一つあるさへ惜しき世に今宵限と堀詰

や。命二つを二つ井戸深い縁とて死にたい

も。皆罪障の大和橋。あの千日に立つ煙無

情の雲の五月雨。フシ降らぬ先にと。死場尋

ねて露にしみづく帷子。肩と裾とは蘭花色

腰に弘誓の船に帆掛けて。襪に磯馴の松原。

是を最後に京橋やら。西に川口船の帆柱。

此處に蛭子の。フシ松原。松のくろみか雨雲

か。降らぬさきとて道急ぐ。はや曉の旅

人や。死死に行くものヨホ知らいで人の。

浮世仇口曲もなや。知らいで人のヨホ知ら

すや人の。浮世念佛も頼もしく。傾く月を。

知るべにて。空を拜めばをち方に。とどろ

くくと遠く鳴尾の海かと聞けば。あれく

よそに轟く。フシ雷鳴の。落ちかゝるとも。

我がつまをよけて涙の袖おほふいや。我は

男よ其方をと互に覆ひおほはれて。今死ぬる身も生身には。目に恐ろしき電光野。な。かの水に飛ぶ鶯。御堂の陰はまがはじと。歩みよろよろ足たぬ戎の。森にぞ。三重へ着きにける

フシ二人は松の。地下蔭に。スエテどうと座を

組み泣きけるが。地男は氣弱き若い者。ア

ア譯もない事したわいの。内にゐる時走の

さきの。菜刀でなりとも一人死ねばよいも

のを。地死ぬるに速を拵へて旦那には事缺

かせ。家の名を出すといひ女房の親兄弟に。

難儀をかける野太い奴と。死面をまぶられ。

日頃立てた正直も無になり。由無い者に縁

ふれたと其方も世間の評議にあふ。許して

たもやとはかりにて。フシ涙。正體なかりけ

り。地なう死際まで其の様に私が事思つて

か。嬉しう御座る。忝いと。フシ共に打伏

し泣きけるが。地これども夫は愚痴ぢやぞ

や。恰好こそは大體なれ。昨日今日の前髪

を姉というても大事な。きさめが醋や殺

したと憤みは我が身一つにて。そこは露ちり厭はねども世間晴れて宿小屋持ち。若い衆のつき合に老女房持つたとて。人が笑をが誂らうが。此の両手の手ありたけは命限りに稼ぎ出し。まあ十五年辛抱すれば。こな様は三十六私は丁度四十一。老女房の威徳に男に家を買はせたと。誂りし人に羨ませ男に鱧を付けうぞと。思つた事いうた事違へば違ふ現世さへ。未来は猶かし覺束なや。中有の旅の雲霧に見失ふ事ありとも。犬死と思つて下さるな。六道の辻にて必ず巡り逢はうぞや。ヲ、をんでもない事たとへ畜生界に落ち。蟲けらに生るゝとも同じ蟲と生れうと。思ひ詰めたか詰めました。さはさり乍ら何にならうとも知らね身の人界の見納め。ま一度顔がよう見たい私も見たいと引寄せく。我故に殺すか。女房故に死なしやんすか愛しいぞや愛しいと。書きせぬ歎きひぬ思ひスエチ思ひ亂るゝ。夏草のッ萎れ。伏してぞ泣きゐたる。あれ〜夜明も近付くから〜人の通もある。二人が帯を結び縋ぎいうた通りと解かんとすれば。いゝや帯を解いては見苦しからん。此の絹は親方の商物。盗みはせねども斷りいはねば盗みも同然。これを此の木に結ばへ付け日

那の絹にて首縋れば、旦那の手にかゝるも同然。一つの罪や脱ると昔の例求女塚。是も男と女郎花をそれはくねる是は又。うねりし松に手を取りて渡るも夏の浮橋や。無明の橋の最細きオチ心の罪に踐み滑る。フシ足を踏みしめ。地踐みしめても上り煩ふ男の體。女子の身でさへ上るものこりやどうぞいの手を引けば。二郎兵衛涙をばらくと流し。ア、主の罰の恐ろしや。此の足袋の片足は旦那のお古。常は兎もあれ此の時は頭にも戴く筈。土足にかけし其の咎お許しなされ下されと。脱棄て登る松が枝にそりや雷光鳴らうぞや。喫驚して落ちまいぞと夕立類る雷神。目さすも知らぬ松蔭に何やら暗うて見えてこそ。慇深い事ながら顔を寄せて下さんせ。雷光の影になりとも顔が見たい見せたいと。くわつと光ればわつと泣き。叫ぶ聲々雷神も思ふ仲をばよも裂けぬ。涙の雨に二重三重しめつけく。二丈の絹も我々が一つ蓮は一丈ぞ。往生淨土は一寸も伸へも縮めもサアよいか。首の結目生々世々解けぬ契の堅結び。サアもう物はいはれぬいひたい事は御座らぬか。其方はないか私は父様母様が。懐しいこればかり我はかみ様旦那様の事。いゝて書きせぬ此の外

は。た、南無阿彌陀佛ばかりぞ。サア只今が南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛〜。と踐みはつし。落つる袂を引寄せて抱きついても苦みの。寄りては離れ離れては足を。締め手を伸し虚空を掴む臨終の。互の目には見えながら物はいはれず岩代の。松に懸れる下藤。嵐に懼む如くに次第々々に弱り果て。消え行く星と諸共に。一度に息絶え目を翳く。術女揃ひし死衣刃に伏すは古手にて。これ心中の新物と聞く人。回向をなしにける。

右之本令吟覽頌句書節墨譜  
等不殘毫厘令加筆候可有開  
版者也

竹本 筑後 塚  
竹本 敬

重而予以著述之本令校合候  
畢全可爲正本者歟

近松門左衛門

正本屋 山本 九兵衛 版  
大阪高師橋壺丁日 山本 九右衛門 版